



新生! FNハイパワー

Cover Photo
Muneaki Samejima
© WORLD PHOTO PRESS 2023
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

004 **LIFEが語るベトナム戦争**
20世紀アメリカ社会と兵士の顔 文／原克（早稲田大学教授）

014 **Biết kich—別激—**
知られざる南ベトナム軍コマンド部隊の実像（3）

022 **北ベトナム軍フォトアルバム** Part 2

まだ語られていない
028 **LST船員の記録** 第14回
UNTOLD SEAMAN BLUES

ベトコンを探せ!
038 **NIGHT HUNTER**
OPERATION Part 5

044 **ベトナムを遠く離れて——。**
私的ベトナム戦争映画／TVムービー Part 17 文／小倉 徹

048 第53回 **サイゴン物語** Saigon Memories
MACVがいたベトナム戦争「入口から出口まで」〔02〕

The Equipments of the U.S. Force
055 **[現用米軍装備カタログ]**
「海」装備特集 part 10 解説／松原 隆 撮影／山崎 学
1990年代後半～2000年代の強襲上陸装備 BHI&BPS編

064 **Militaria Roundup!**
U.S.A.A.F/U.S.A.F.フライング・スーツ 1940's～60's

070 **ウェスタンアームズ新製品リポート**
by SHOTGUN MARCY
●ベレッタM92FS V8フルオート
●コルトM1911 100周年記念モデル
ヘレッツ・ウッドグリップVer.



078 トイガンニュース TANAKA WORKS
●九七式狙撃銃Ver.2ブラック 鬼胡桃銃床仕様
●S&W M19 6インチ コンバット・マグナムHW

086 **東京マルイ新製品リポート**
by Takeo Ishii
●電動ガンスタンダードタイプ
H&K MP5 SERIES

DJちゅうの
091 **GEARHEADS JUNCTION** ミリキャン編

ニッポンのちからこぶ ●写真と文／菊池雅之

096 **令和5年 降下訓練始め**

100 **新製品情報 COMBAT mono**

102 **サバゲ三等兵APS部**
迎春! 初撃ち! おまけに書初め!

COMBAT FRONT LINE

101 2023新春
ブラックホールリポート
107 今月の中田焦点!
セスラー タイプCWU-27Pジャケット
108 新作映画情報
『フォール』『呪呪呪』『シャドウブレイ』

104 ボスゲリラ不屈のトイガン魂!
サバゲ・マスカラ・コントラ・マスカラ!

106 レアミリタリーテクノロジー

109 遊戯銃生誕60周年記念 ASGK特別プレゼント

111 奥付&次号予告



ミリタリースポッター

What did grunts carry in Vietnam?
SP4 Harold K. Collins carried a rifle (M-16) and
also radio on his back because he was a RTO.

Infantrymen, aka grunts were issued RUCK sacks with aluminum frames,
carried 2 frag grenades, 2 smoke grenades, 1 claymore mine, helmet,
poncho with liner, entrenching tool, M-16 ammo, machete, sandbags,
C-rations and 1 1/2 gal. water canteen.

Photo/US Army

クチの南西17km、オリエンタルリバーの東で「コールコール作戦」に従事する第25歩兵師団第2歩兵旅団第27連隊第2大隊所属のSP4ハロルド・K・コリンズが、つかの間の休憩を取る。彼が背負うラックサックには、手榴弾、発煙弾、クレイモア地雷、ヘルメット、ライナー付きボンチョ、シャベル、M-16用弾丸、マチェーテ、土嚢用袋、C-レーション、水筒に加えて無線機器がのっかっている。なぜなら彼は、無線特技兵だったからだ。1967年7月6日

LIFEが語る ベトナム戦争

20世紀アメリカ社会と兵士の顔

文／原克（早稲田大学教授）構成／編集部

20世紀を代表する雑誌『ライフ』。鋭い舌鋒と豊富なビジュアル情報で20世紀米国市民社会のオピニオンリーダー誌として絶大なる影響を与えた。本シリーズは雑誌『ライフ』が報じたベトナム戦争を扱う。焦点を当てるのは、『ライフ』が理解し伝えようとしたベトナム戦争。つまり『ライフ』によって語られたベトナム戦争である。そこには戦争のリアルを語りつつも、米国市民社会が抱えこんでいた願望や苦難が無意識のうちに投影されているだろう。本シリーズでは、そうした『ライフ』の戦争表象に着目し、アメリカ社会とベトナム戦争の構造的関係を明らかにするものである。

第1回「攻撃者たち リアルを剥がされた抽象性」



夜間奇襲攻撃

『ライフ』1964年6月12日号は、敵を二度殺している。

先ごろ、南ベトナム軍支配下にある「戦略村（strategic hamlet）」が、南ベトナム解放民族戦線（通称ベトコン）による夜襲を受けた。

『ライフ』同号は早速レポートしている。「小さな戦争、遠方の——しかし実に卑劣な」⁽¹⁾と題された特集記事だ。サブタイトルは「ベトナム発。これまでにないほど不吉な予感がする。報道写真家が送る死と残忍と友情の物語。撮影：岡村昭彦」⁽¹⁾とある。

現地を取材したのは日本人戦場カメラマン岡村昭彦そのひとだ。

記事は詳しく伝えている。

曰く、「深夜零時を回った頃、サイゴン南西にある小さな戦略村に南ベトナムの密林から、突然600名のベトコン・ゲリラ（Vietcong guerrillas）が攻撃をかけてきた」⁽¹⁾。

「戦略村」とは、1962年南ベトナム政権がはじめた自治制度で、村落を合併させ人工的に作りあげた集落のこと。村民を一部武装化させ、外壕を掘り、鉄条網をはりめぐらして要塞とし、ベトコンに対抗する拠点化をめざしたものである。

急襲部隊は、有刺鉄線と手作りの防護柵を爆破し、自動小銃を掃射しながら村に突撃してきた。

家族と一緒にこの村に住んでいる守備隊兵士たちは、応戦したが、村の大きなガソリン貯蔵タンクが爆発を起こし、村中を火の海に包んでしまった。結果、銃撃戦と火災で32名の村人が殺害され80人以上が負傷した。「ゲリラ」はすばやく夜の密林に消えたが、「後には24名のベトコンの死体が残っていた」⁽¹⁾。

夜襲が明けた翌朝、南ベトナム軍の救出部隊が到着した。

村はまだ硝煙でくすぶっており、村人は苦しんでいる最中だった。傷や火傷に治療がほどこされ、バラバラに損傷された死体を集めはじめた。死体は高熱で波打ったトタンの上にゴザに包まれて並べられた。

「岡村はひとりの女性が死んだ夫に語りかけている場を目撃した。『きっと、苦しかったでしょうね』。彼女の頬を涙が次々と流れ落ちた」⁽¹⁾。

昼過ぎ、負傷者が搬送されたが、まだ多くの村人が残った。「この村落はもともと、この地域でベトコンの攻撃に備えて要塞化されたものだ」。「だが、多くの住人が亡くなってしまった今となつては、この村は二度と役に立つことはないだろう。戦争というのは、このように町を破壊することで、人びとの魂も破壊するものなのだ」⁽¹⁾。記事は詠嘆している。

攻撃者と生存者

記事は引き続き、「夜間攻撃の置き土産」と題して、ベトコン兵士の死体写真を掲載している。

掲載写真の表題には「攻撃者たち」⁽²⁾とある。

説明文に曰く、「ゲリラたちはほぼ全裸に手榴弾を巻きつけて襲ってきた。翌朝、この三人のゲリラは守備隊の銃弾が命中し防護壕に倒れ込んでいるのが見つかった。手前に写っている棒杭は村の防衛具である」⁽²⁾。

ゲリラの死体写真と並べて一枚の写真が掲載されている。生き残った赤ん坊の写真だ。表題は「ひとりの生存者」⁽³⁾とされている。

説明文にはこうある。「この子の母親が団扇であおぎ、子供たちは無表情で



上／「米軍将校がパトロールを率いる」。南ベトナム共和国軍とアメリカ人軍事顧問。"LIFE" 1964, June 12, FP 中／サイゴン南西郊外の要塞集落が深夜ベトコン・ゲリラ600名の奇襲攻撃を受けた。翌朝、悲嘆に暮れる南ベトナム民兵。「犠牲者の二人。家族がこの村に住んでいた兵士は生まれたばかりの息子の遺体を抱いて涙を流した。ワラで丁寧に包んで埋葬のために名札を付けてある」。ibid.p.34 下／「攻撃者たち」。翌朝発見された「三人のゲリラ」。守備隊の銃弾が命中し防護壕の泥中に倒れ込んだ。「加害者の末路」という神話構造。ibid.p.36

¹ "A little war, far away — And very ugly. From Vietnam, more ominous than ever, a photographer brings a story of death, cruelty, friendship, photographed for LIFE by AKIHIKO OKAMURA" in: LIFE, 1964, June 12, p.34

² "The Attackers." ibid. p.37

³ "A Survivor." ibid. p.37

Biết kích

別激

第3回

知られざる南ベトナム軍 コマンド部隊の実像(3)

SPECIAL INTERVIEW WITH
FORMER SOUTH VIETNAMESE
COMMANDO Lt. HOA PHAM (PART 3)

ベトナム語で
Biết kích(別激)と呼ばれるコマンド部隊。
ベトナム戦争中に南ベトナム軍コマンド部隊で戦った
ホア少尉への特別インタビュー。
最終回となる今回は、ともに戦ったアメリカ軍
コマンド部隊との絆に焦点を当てていきます。

Text/Kentaro Suzuki
Interview/Hiroko Ito
Photos/Hoa Pham, US ARMY,
AUSTRALIAN WAR MEMORIAL, WPPアーカイブ



MEMBER OF SPECIAL OPERATION GROUP, VIETNAM
AFTER THE PRESIDENTIAL UNIT CITATION AWARD
FORT BRAGG NORTH CAROLINA, 04/04/2001
COMMANDOS MEMBERS WITH THE RED BERETS

(上) 南ベトナム軍空挺部隊とコマンド部隊のシンボルであるスカールレットのベレーを被って式典に臨むホア少尉。極秘任務に就いたのが50年前とは思えないほど若々しく、精悍な表情はまるで現役兵士ようである。(左) MACV-SOGと連携して極秘作戦を行っていた南ベトナム軍戦略技術総局NKT(英語での略称はSTD)のエンブレム。左上から時計回りに航空支援を務めた第219飛行隊「龍馬」(Long Ma)、沿岸警備部、コマンド黒龍(Hac Long)、コマンド雷虎(Loi Ho)の部隊章が描かれている。ホア少尉はコマンド黒龍に所属して敵地での偵察活動を行っていた。

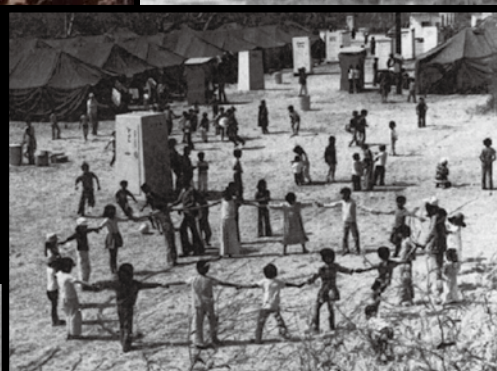
MACV-SOGが大統領部隊感状を授与されたことを記念して撮影された元SOG/NKTコマンド隊員の集合写真。ホア少尉は前列右端に写っており、よく見ると前列中央にはSOGの活動に深く関わっていた日本出身のアメリカ軍特殊部隊員、三島瑞穂軍曹と思しき人物の姿もある。



(上) サイゴン陥落にともない南ベトナムから脱出した人々が住んでいたベンドルトン海兵隊基地のテント村。ホア少尉もコマンド部隊の戦友とともにこの基地でしばらく過ごしていた。(右) テント村の脇で子どもたちが遊んでいるところ。子どもたちの中にはこの基地で活動するボーイスカウトに加わる者もいた。(下) 基地の難民支援センターに建てられていた彫像。助けを差し伸べる手のひらには子どもたちの像があり、さらにベトナム人の子どもたちが座っている。



士官学校におけるホア少尉と仲間たち。左肩には当時士官教育課程が行われていたドンテー下士官学校の部隊章が付けられており、襟には士官候補生を示す階級章も見える。この写真はホア少尉がコマンド隊員となる数か月前に撮影された。



(上) テント村でリラックスした表情を浮かべるホア少尉。コマンド部隊とは不釣り合いなテントの落書きが時代を感じさせる。少尉の隣に座っているのは空挺隊員として戦ったブイバンハイ軍曹。(左) 海兵隊から支給されたと思われるフィールドジャケットを羽織り、祈りを捧げるお年寄りとその家族。南ベトナムから逃れた人々の多くは荷物をほとんど持たず、着の身着のままの者も少なくなかった。



(左) 残念なことにはっきりした撮影日時が分らないのだが、ホア少尉の隣に写っているのはグエンバンチュ元南ベトナム大統領である。この写真はワシントンD.C.で撮影されたもので、チュ元大統領は晩年をマサチューセッツで過ごしていた。(右) ビルクリントン元アメリカ大統領とホア少尉。少尉と戦友たちが着ているのはSOAA(Special Operations Association of America=アメリカ特殊作戦協会)在籍10年を示すブレザーで、ベレーにも専用のフラッシュが付けられている。



北ベトナム軍フォトアルバム

Part 2

北ベトナム軍兵士を捉えた貴重な写真を紹介するシリーズ第2弾。
今回は北ベトナム国内での姿を中心に紹介します。

文／鈴木健太郎 写真／WPPアーカイブ、D White コレクション、US. ARMY



ソ連製37mm高射機関砲M1939 (61-K) あるいはその中国製コピーである55式の配置に付いた陸軍兵士たち。スチールヘルメットや戦闘服の襟に付けられた記章など、当時の北ベトナム軍の軍装が良く分かる非常に資料性の高い写真である。スチールヘルメットは歩兵部隊ではあまり着用例が見られないが、砲兵部隊ではソ連や東欧からの供与品が数多く使用され、一部にフランス軍や日本軍からの鹵獲品も用いられている。後ろに写る兵士が肩にかけている銃はSKSカービンで、銃身の下には折りたたみ銃剣の基部が微かに見えている。



口径14.5mmの4連装高射機関砲ZPU-4とその要員。スチールヘルメットと戦闘服など基本的な軍装は前ページと同じだが、トラウザーズベルトが茶色い人造皮革で作られたものとカーキのコットンウェビング製の二種類が混在しているのが分かる。戦闘服の右胸には名札のようなものが付けられているが、何が記されているかは判然としない。



12.7mmDShK重機関銃で空の警戒にあたる民兵。シャツがトラウザーズにたくしこまれておらず、記章が見当たらないなど服装が少々ラフになっている。



(左上)(上右)(下) 前ページと同じタイプの高射機関砲と配置に付いた陸軍兵士たち。非常に明るい色合いの戦闘服と防暑帽が目につくが、これは退色ではなく初めから白がタンで作られたもののようだ。一連の写真ではマントのように羽織ったネットや枝葉を使った擬装が機関砲と兵士たちのシルエットを隠すのに高い効果をあげているのが良く分かり、スチールヘルメットは日本軍の九〇式と思われるものの姿もある。アコーディオンの脇にいる女性補助員が腰にポケットが付き、合わせが逆になった戦闘服を着ているのも非常に興味深い。



UNTOLD SEAMAN BLUES

写真と語り／木村 守 (元LST乗組員)

文／吉野文敏 構成／編集部

【第14回】

まだ語られていない
LST船員の記録

新大統領に就任したニクソンは「名誉ある撤退」の名の下、1969年8月までに約2万5000人の米兵を撤退させた。その一方で停止していた北爆を再開するなど、泥沼化したベトナム戦争は終結の兆しを見せていない。1年近くに及んだ木村さんの長かった5回目の航海はこの年の夏にようやく終了し、長い有給休暇を取った。

ダナンの豚の市場。生きた豚が竹籠に押し込まれて地面に転がっている。「しっぽと耳を持って豚を連れているオバチャンも凄いです。20〜30kgはありますよ。脚バタバタさせて、ブーギャー鳴き叫んで、しっぽがちぎれるんじゃないかと思ってねえ」。

ベトコンを探せ!

NIGHT HUNTER OPERATION

Part 5

夜間に敵を追うナイトハンター作戦を成功させる鍵は「大地と空と水の上」にいるすべての参加要員が、同じターゲットエリアにいて、通信手段が確立されていることが大前提になる。作戦には不測の出来事がつきものであり、これに正しく対処するためにも味方のいる場所を把握しておく必要がある。

写真／US Army, US Marine Corps Archive, and DoD

船が行き来できる川や水路にある戦略上重要な地点には、番号を振って地図に記した。その地図は、ヘリの騎兵部隊や河川哨戒任務を行なうTボート、すなわちタンゴボートがいる部隊と、指揮と管制を行なう司令所の全署で共有した。ナイトハンターの機動部隊は、タンゴボートの動きを見失うことなくトレースしていた。大規模な敵との交戦が発生した場合には、地上に歩兵部隊を降ろして、それからさらに敵との交戦が続いているエリア担当の騎兵部隊に緊急発進命令を出して、5分以内に当該エリア上空に空挺部隊を散開させた。騎

兵部隊が、別の目標エリア上空で、敵を無力化するために飛んでいた場合には、彼らをただちにタンゴボートが交戦しているエリアへと振り向けた。そして撤退する敵を追跡している地上の歩兵部隊に対して、空からの近接支援を行なうように指示した。

砲兵中隊2個を使ったテストが、進行中だった。1個の中隊は、155mmの榴弾砲を配備しており、もう1個の中隊は105mm砲を擁していた。連続で6時間は明るさを確保できるだけの照明弾が、手元に確保されていた。作戦実施から2日目を迎えた晩には、照明弾を打ち上げる高度と打ち上げ

個数をいろいろに変えながら、テストが行なわれた。3日目の晩になると、最適な明るさを実現できた。明るい月が出ている晩は、ターゲットエリア上空の高度400mで照明弾を発光させ、その直後に高度600mで2発の照明弾を発光させると、良好な照明が得られた。それ以後は、60秒ごとに1発ずつ、高度600mに照明弾を打ち上げた。月が暗い夜にも、最初の実施したのと同じ照明弾の打ち上げ手順を実施した。その後から打ち上げる照明弾は、30秒ごととした。1個以上のターゲットとなる建物を目視できた場合には、それらを地図に落

とし込んだ上で、砲兵中隊に向けて、第1ターゲットと第2ターゲットなどと名前を付けて、データを送信した。1個の中隊が最初のターゲットを攻撃している間に、2番目の中隊は、高性能爆薬か、もしくは目標に近接すると自動的に爆発する信管を付けた爆弾と照明弾の準備を完了させた。当該ターゲットが爆破されて無力化された時に、ヘリの騎兵部隊の隊長からの指示があれば、いつでも出動できるように彼らは待機していた。

重要地点において、ターゲットとなりうる建物を目視で確認し、その場所が確定できたら、ヘリの機動部

ナイトハンター作戦で、欠かせない役割を果たしたのが投光器を積んだヘリUH-1Dの「ファイヤーフライ」だった。ここでは輸送機C-130の着陸用ライトを7本、クラスター状に組んでいる。1969年8月13日



第193回 **【現用米軍装備カタログ】**
「海」装備特集 part 10

1990年代後半～2000年代の強襲上陸装備 BHI&BPS編

●解説／松原 隆 ●撮影／山崎 学 ●協力ショップ／LAZY CAT、トイソルジャー、TRI'S(旧特小工房) ●協力／木島秀邦

THE EQUIPMENTS OF THE U.S. FORCE

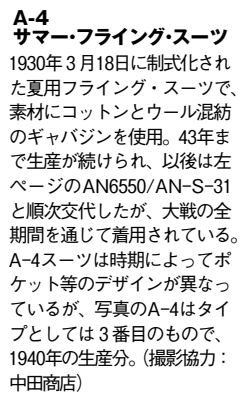


U.S.A.A.F/U.S.A.F.フライング・スーツ 1940's~60's

今回は第2次大戦からベトナム戦争にかけて使用されたアメリカ軍のフライング・スーツ(カバーオール)を紹介しよう。

第2次大戦前の夏用フライング・スーツ

これはアメリカ軍も同様で、冬用に動物の毛皮を内張り（ライニング）に使用。夏用は内張のないワンピースのカバーオールを採用している。1920年代にはギャバジン製のA-1とコットン製のA-2が開発され、その後コットン製のA-3が後継モデルとして採用された。その後1930年にギャバジン製のA-4スーツが採用され、これが第2次大戦（1939～45年）で大量に使用されるが、20年代採用のスーツも限定採用（在庫が無くなった時点で廃止）装備として使用されている。また、色がスレート・ブルー（灰青色）のA-5が37年に採用されているが、その使用量は少ない。



そして1943年には新型で陸海軍共通の仕様（スペック）の夏用スーツがAN6550/AN-S-31として採用。それ以外にA-6スーツも開発されたが、制式装備としては短命だった。そして陸軍航空隊は44年に飛行服着用温度区分（後述）を制定しそれに対応したフライング・スーツを開発。それが44年11月に採用されたK-1とL-1スーツ（デザインは共通で使用布地が異なる）で、その後のフライング・スーツのデザインを確立したのもとなっている。

L-2 フライトジャケット

JACKET, FLYING, LIGHT
TYPE L-2
SPECIFICATION MIL-J-8391
USAF PART NO. 508503-2
SIZE 36
USAF STOCK NO. 8300-470885
ORDER NO. AF-12850
AMERICAN DAD & TEXTILE CO.



サマー・フライング・スーツ /AN6550/AN-S-31

SUIT, SUMMER, FLYING/AN6550/AN-S-31

AN6550/AN-S-31はバリエーションが多いことで知られ、布地にはコットン・ツイル、コットンとウール混紡のギャバジン、“バードクロス (Byrd cloth)” と呼ばれる薄手のコットン・ツイルが使われた。色は薄手の生地がカーキ色で、厚手の生地が明るいオリーブ・ドラブだったが、1942



サイズ・タグ

襟元に付けられたサイズ・タグ。表示が胸囲のインチ表示と“S,M,L”表示の併記となっているのが珍しい。ハンガー・ループの下にも番号が書かれたタブが付いているが、何を示すタグかは不明。下には陸軍航空隊の装備であることを示す部隊章がプリントされている。



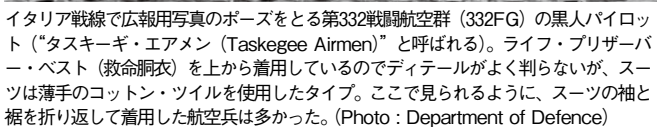
ウエスト・ベルト

腰には布製のベルトが付くが、これは1920年代のサマー・フライング・スーツからのデザインを継承。ベルト本体はスーツに縫い付けられており、取り外しはできない。バックルは爪のないフレーム式のトレンチ・バックルを使用している。



裾のタブとボタン

戦前に陸軍航空隊が採用した夏用フライング・スーツは裾をスライド・ファスナーとスナップファスナーで閉じたが、大戦中のスーツではタブとボタンで裾を閉じように変更されている。これは戦時の大量生産のための簡素化と思われる。



ラベル

左前身頃の内側に縫い付けられた織りラベル。
AN6550の型式が入ったタイプで、①アイテム名、
②サイズ、③契約番号、④メーカー名を表示。一番
下の所有者表記が“Property of
U.S. Government”で、陸軍航
空隊ではなく、合衆国政府にな
っているのに注意。ラベルの型
式は“AN6550-M38”だが“M38”
は「ミディアム、胸囲38インチ」
のサイズ表示。



ポケット

サマー・フライング・スーツのポケットは胸、腰、裾の6か所で、前モデルのA-4スーツと異なり、フラップとボタンが追加されている。胸はバッチ（貼り付け式）・ポケットだが、裾ポケットはフラップとボタンの付いたスリット式。ちなみに初期生産分のサマー・フライング・スーツは胸ポケットが左胸のみだった（次見開きAN6550参照）。

ンのセフティ・レバーで操作する。フルオート用の独立したパーツを追加していないので、使用感はさわめて自然だ。セフティ・レバーは水平でセミオート、下げ切った位置でセフティ、その中間が新たに追加されたフルオート・ポジションになっている。セフティ・レバーにはしっかりとしたクリック・ロックが組み込まれているので、フルオートの衝撃でレバーがズれる心配はない。デ・コッキングメカを巧みに利用したメカニズムなので、セフティ・ポジションでのデ・コッキングと、ダブル・アクション機能は省略されている。初弾を素早く発射するためには、M1911同様のコッキング&ロックでの携帯が不可欠なメカニズム。よりプロライクなテクニックを要求されるM92FSのバリエーションといえるだろう。

全弾を撃ち尽くしてストップしたスライドをリリースするレバーは、これまでスペシャル・パーツとして

何度か採用されたロングスパー・タイプ。右利きの場合、グリップを握った手の親指で楽にレバーを操作することができる。マガジンチェンジの後、連続してターゲットに撃ち込むことができるメリットの多いスライド・リリースレバーだ。

新たに採用されたカーボンファイバータイプの樹脂製グリップが、近未来的なムードを醸し出す「ベレッタM92FS/V8フル・オートマチック」。CBHWの重いスライドが叩き出す強いキックと、連続する高速ブローバックの迫力を、是非その手で確かめて欲しい！

独自のシステムを搭載し、さまざまなカスタマイズを施して登場したM92FS/V8。特殊部隊専用のシークレット・ウエポンをイメージしたフルオート・タクティカル・カスタムだ。

TOY GUN
REPORT

WESTERN
ARMS

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
©ウエスタン アームズ 03-3407-5922
<http://www.wa-gunnet.co.jp>

COLT M1911 100周年 記念モデル HERRETT'S WOOD GRIP Ver.

1世紀に渡ってセミ・オートマチックの
頂点に君臨するM1911を讀えて製作された
100周年メモリアル・モデルを完全再現!!

※撮影用のモデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様異なる場合があります。



新生! FN HIGH POWER

銃器の歴史を語る上で欠かせない歴史的なモデルがいくつか存在する。「1911」を始めに数々の銃を設計してきた天才的銃器デザイナー、ジョン・ブローニングが晩年に設計し、その完成を見る前に亡くなった「FNブローニング・ハイ・パワー」も間違いなくそのひとつだろう。今回は、その現代版アップデート・モデルとなる新生FNハイ・パワーを紹介しよう。



ハイ・パワー・ピストルの歴史

ハイ・パワー・ピストルの開発はフランス軍のサービス・ピストルのトライアル用として始まった。銃の設計をしたジョン・ブローニングは「1911」をはじめ、多くの銃器を設計しているが、ウィンチェスター社との関係が悪化してからは、ヨーロッパに移住。ベルギーのFN社にブローニングM1900やブローニング・オート5のデザインと権利を売り込んでいた。その繋がりからFN社はフランス軍の要求するサービス・ピストル用に、新たなピストルの設計を彼に依頼する。しかし、ジョン・ブローニングは1923年頃にハイ・パワー・ピストルの開発を始めたものの、1926年に病で突然この世を去ってしまう。結局、最終的な仕上げはFN社の設計者が行ない、ハイ・パワー・ピストルは完成に至った。

その後、第二次世界大戦が勃発。ベ

ルギーはドイツの侵攻により、占領下となってしまう。FN社も武器製造をさせられることになった。ハイ・パワー・ピストルもその間にドイツ軍用に製造されている。ハイ・パワー・ピストルの歴史は100年近くになり、その間、P-35、HP-35、GP（※フランス語での略称）等、HP（ハイ・パワー）、BHP（ブローニング・ハイ・パワー）以外にもさまざまな名称で呼ばれている。数々のクロウ

H&K
MP5
SERIES

重厚リアルな
次世代MP5の登場で
逆に際立つ
「値ごろ感・手軽さ・軽快さ」
いまふたび
熱い注目を集める
電動ガンスタンダードタイプ
MP5シリーズ!

Photo & Text by Takeo Ishii



電動ガンスタンダードタイプのMP5シリーズのリアサイトは左右調整およびピープサイト穴の変更（4段階）のみ可能。



電動ガンスタンダードタイプのMP5シリーズはリコイルがほぼ無く、人が構えての集弾性ではむしろ有利かも。ちなみに0.20g 弾使用時の初速は「81～82m/秒（＝約0.67ジュール）」、フルオート発射速度は「12.5発/秒」だった（※いずれも実測値）。



電動ガンスタンダードタイプのSD6のサプレッサーはラグで固定されており90度回すと着脱できる。インナーバレルのクリーニングやサプレッサーのクリーニングも容易だ。



電動ガンスタンダードタイプSD6では左右の四角いピンがハンドガードのロックになっている。なお「8.4Vニッケル水素1300mAhミニSバッテリー」の収納位置は機種毎に異なる。

電動ガンスタンダードタイプの時代からA4 & A5系（左）とSD系（右）ではコッキングハンドルのレイアウト（角度）がハンドガードに合わせて変えられていた。



高性能電子回路「Mシステム」搭載と、トイガンの限界に挑む重厚かつソリッドなリアリティで大絶賛 & 大ヒット中の次世代MP5シリーズ。そして今、リアルに実銃を写した外観は同じでもコンセプトは対極にある先輩＝電動ガンスタンダードタイプのMP5シリーズもまた、ふたたび脚光を浴びているという。

樹脂レシーバーならではの「総重量2kg前後」という軽快さ。シンプルにして必要十分な実射性能。そして何より「次世代MP5の半額以下！」

という値ごろ感は大きな魅力だ。

登場から27年、フィールドを縦横無尽に駆け巡る機動派ゲイマーから常に愛され続け、また機会あるごとに細部の改良や派生モデルの登場でバトルブルーも完璧！ さらに一部モデルは「ハイスイクル・カスタム」として戦闘力をUPさせた。

次世代MP5シリーズ登場を経て、むしろスタンダード電動ガンMP5シリーズの独自性・先進性はより際立ち、いっそう輝いて見える。

●タクティカルスリングセット 2,750円



MP5といえば3点スリング！東京マルイ純正品はワンタッチ・リリースで素早いポジション変換が可能。



DJちゅうの GEARHEADS JUNCTION

写真・文/DJちゅう

5th MIL-CAM
2022.11.19-21
Military Camp Event

GEARHEADS: [ギアヘッズ]
熱狂的な装備フリーク—
JUNCTION: [ジャンクション]
接合、連接、交差点または分岐点—

#MILCAM
#ミリキャン





第1空挺団の隊員らが、入間基地に所在する第2輸送航空隊第402飛行隊のC-2より次々と降下していく。当日は約1万人の来場者が詰めかけ、澄み切った青空の下、降下訓練始めを見守った。

令和5年 降下訓練始め

毎年年頭の恒例行事となっている第1空挺団による降下訓練始め。官公庁が実施している仕事始めのひとつである。今回は米英豪軍の空挺部隊等も加わり、初の4ヵ国間での実施となった。これは日米同盟に加え、英豪軍との防衛協力も深化してきている証である。新たなステージに突入した日本の安全保障体制を見よ!



2023年1月8日、習志野演習場（※千葉県八千代市など）において、第1空挺団による「令和5年降下訓練始め」が行なわれた。コロナ禍となり2021年から一般公開を中止していた為、今回は実に3年ぶりの完全な一般開放となった。

第1空挺団は、陸上総隊直轄部隊のひとつであり、陸自唯一のパラシュート降下部隊だ。

降下訓練始めのルーツは1969年から年頭行事のひとつとして行なわれるようになった「開傘祈願祭」だ。実際に空挺降下を行ない、1年間の訓

練の無事を願うのが目的だった。これを1974年より国民にも公開するようにした。それに伴い、国民に自衛隊の活動を知ってもらうことを目的として、降着後の戦闘の様相も展示するようになり、諸職種他部隊も加わっていき、年々規模が大きくなっていった。

こうして半世紀にわたり、第1空挺団が主となり、降下訓練始めおよびその後の訓練展示が行なわれてきたが、2017年から米軍が参加するようになった。さらに、今回は初めてイギリス軍およびオーストラリア軍

も加わり4ヵ国での実施となった。

アメリカからは陸海空軍

約70名が参加。米陸軍から第11空挺師団、第82空挺師団、第1特殊作戦群第1大隊（グリーンベレー）、米海軍から第12ヘリコプター海上戦闘飛行隊（ゴールデン・ファルコンズ）、米空軍から第374空輸航空団という陣容。英陸軍からは第16空中強襲旅団の約20名が参加。豪陸軍からは国防軍空挺学校の約10名が参加。

日本側も第1空挺団に加え、富士学校、水陸機動団、第1ヘリコプター団、教育航空集団（海自）、航空支援集団（空自）が参加している。総人員は約1,000名にもなった。

これまで陸自は日米同盟に基づき、米軍とのみ訓練を行ってきたが、近年では防衛協力として豪軍や英軍とも2ヵ国間訓練を行なうようになっている。これら国々は「同志国」と呼び「同盟国」である米軍とは異なる枠組みであることを明確にしている。その他「同志国」には、フランスやインドなどもあり、今後も増